

隨筆集

平步晴天

渋谷光三

近代文藝社

隨筆集

平步晴天

渋谷光三

著者紹介

1924年 埼玉県秩父郡生れ。

NHKに勤務し、中央研修所教授・放送局長を経て定年。
のち視聴者センター主幹・古賀音楽大賞事務局長。この
間岩手大学講師・岩手県社会教育委員など。以後NHK
会友。

現在 日本歌人クラブ会員・川越ペンクラブ代表幹事・
同人誌『武蔵野ペン』発行者・『歩短歌会』主宰・『文芸
川越』編集委員等。

著 書 歌集『飛鳥似鳥』・同『荒晴』・児童図書『テレ
ビの話』・随筆集『きのうの虹』その他。

現住所 〒350-11 川越市霞ヶ関東5丁目18-15

随筆集 へいほ せいてん 平歩晴天

1995年11月30日 第1刷

著 者 渋谷 光三 (しぶや・こうぞう)

発行者 福澤 英敏

発行所 鑿近代文藝社

〒112 東京都文京区目白台2-13-2
(03)3942-0869 Fax (03)3943-1232

印 刷 信毎書籍印刷株式会社

製 本 小泉製本所

©Kozo Shibuya 1995 Printed in Japan
定価はカバーに表示してあります

ISBN 4-7733-5265-5 C0095

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

I おやじ馬

ネオ・ホームレス

6

ヘンシーン

14

目玉の学校

19

揺れちがい

26

ヘア談議

34

ゆきひら猫

40

トッポばなし

46

II 脱兎くん

小使さん

54

野良坊

65

風の兵隊

76

III

余談閑談

校歌

84

天まで揚がれ

96

或る青春と歌

110

バックボーン

113

柔術極意和歌

117

鬼と青女房

126

津田梅子の蔵書

133

鈴虫水車

138

古典丸かじり論

143

日本語の忘れ物

146

走るコトバ

150

戦国バブル

153

あとがき

156

隨筆集

平步晴天

I

お
や
じ
馬

ネオ・ホームレス

盛岡に来て半年になる。以前盛岡に住んだのは、昭和三十八年から四十一年までの三年間で、今度は言わば、出戻りのお勤めである。そして、今度もまた岩手山が目の前に見える北の郊外の、上田の社宅に住むことになった。以前に住んでいた家と道路を挟んでの向かい合いに、今の私の家がある。周囲は多少家が増えたが、おおよそは前のままだ。

半年前の初夏のころ、わたしはスーツ・ケースを下げただけの身軽ないで立ちで盛岡駅に降り立った。タクシーを拾って、北上川を渡り、材木町から長町に出て岩手大学の裏の田圃道に出る。ここからは正面に岩手山が見えてくる。なんと懐かしい山の姿であることか。「ご先祖様しばらくでございました」そんな気持であった。一高の校舎が立派になったな、道路もいいし、そうだ、この横道を入ると、家並みの中にところどころ水田があつて、そのむこうに赤い屋根のひらべったい社宅が三軒並んでいて、一番奥が私の住んでいた家だ。

そのとき私の頭に一つの記憶が蘇った。そうだ！あのポプラはどうなっているだろう。

最初に盛岡に住んで間もないころ、たしか秋のころだったと思うが、家内が裏の空き地から

一本のポプラの苗を掘り取つて来た。それは鉛筆ほどの太さで三十センチ余り、五・六枚しかない葉っぱの樹液が、透けて見えるような柔らかな苗木だった。それを二人して庭に植えた。転勤族のうら悲しい思いであつた。それから三年過ぎうちに、ポプラは二メートル程に成長した。ここは新しい社宅だったので、庭木らしい庭木が無かつたのに、ポプラはここが余程気に入つたのか、みるみるうちに大きく育つた。夏の台風には物干し竿で支えをしてやつた事もある。

あれから五年たっているが、あのポプラはいつたいどうなっているだろうか。私は車の中で、頼りになる身内を探すような思いで、しきりにポプラの事を考えていた。

そこで着任するとすぐさま、私は今の家主であるI君にポプラの事を尋ねた。

「ウヘッ、あのポプラですか。信じられないなあ。今ではあのへんの名物ですよ。ウソでしよう、あんなでっかいの」

I君は頭を搔いて笑う。丈はどのくらいあるかと聞くと、完全に十メートルはあると言う。直径はまず二十センチはあるかな、と両手で輪をつくつて見せた。

翌日私は早速見に行った。気もそぞろである。上田のバス停から少し歩くと、あつた！まさにそのポプラはあつた！ 見上げる位置からは岩手山を背景に、そのポプラは巨大な紡錘形の柱となつて立っているではないか。風をはらみ風をおこして、静かだが重い音をたててそよいでいる。私は泣きたい程感動して、しばらくはそのポプラに見とれていた。

そうして見てみると、今度はポプラが私に向かって

「ご主人さま、どうもしばらくでございました」

とこずえを揺すって挨拶しているようにさえ思えた。

その晩私は長距離電話で家内を呼び出した。

「オイ、親は無くても、キは育つという言葉を知ってるか」

「なんなの？ どういうことなのよ」

「アノナ、おれたちが植えたポプラ、ナ、覚えてるか、あれが十五メートルにもなってるんだよ。俺の頭くらいの太さになって！」

私は大きくホラを吹いた。電話のむこうで家内が「まさか」と言った。

「じゃあ見に来て、すぐ見に来て。なにしろ遠くからでも目印になるって代物だ。ところがあんまり大きくって、葉っぱが遠くまで散って近所からは苦情も出てるってよ」

しばらくして盛岡を訪ねた家内も、私と同様の感慨にうたれたらしく「まあまあ」を繰り返すだけであつた。そういういきさつのある最初の赴任からもう八年にもなる。最初の三年の勤務を終えて盛岡を去る日、家内が「この木どうしよう」と言った。まさか再びこの木を仰ぐなんて、当時私は思いも掛けなかったから

「今度来る人に可愛がつて貰うことだな」

と言ってしみじみと仰いだのであつた。その時はまだ二メートル余の若木であつたが、それ

が五年程の間にこんなにも大きくなる。巡り会いという事は何人も人間同士に限らない。こういう出会いを繰り返しながら、人は生きてゆくのだろう。かくして、私は再び盛岡の住人になったのである。

単身赴任というものは、まことにのんきである半面味気ないことおびただしい。冬の夜のひとりの食事ときなどは、殊にこの感が強い。誰でもいいから話相手が欲しくなる。こういう時は大いに危ない。若武者なみの年代なら脱線も許されるだろうが、もはやこの年ではその勇気も元氣もないし、世間様も許してはくれない。ひたすら仕送りを続ける働き蟻のようなものである。その思いを支えるわずかな救いは、この町にも東京からやつて来た同じような仲間が少なくないという事だ。盛岡には、そういう単身赴任の中年男が一体何人くらい居るのだろう。テレビの前で、ひとりチビチビと盃をなめながらふと考えた。いっぺん市役所か税務所に聞いてみるか、おそらく百人は下るまい。我ながらくだらんことを考えるものだと思いがら、だが今夜のこの時刻に、私と同じような独り者が何十人何百人か、この盛岡の空の下に居ると思うと大いに愉快だ。

愉快ついでにいろいろな推察をこころみる。脳裏に登場するのは、ワイシャツの袖をたくし上げて洗濯機に頭を突っ込んでいる男、私と同じようにテレビを見ながら鼻毛を抜いている奴、まてよ、一杯飲み屋で女の子をつかまえ、独身を売り込んでいる野郎だっている筈だ。しかし、そのあとすぐ気がついた。——何だあ、みんな俺がやったことじゃないか——。

『チョンガー』というのは朝鮮の言葉で、嫁さんの居ない男という意味だそうだ。だが我々の場合は、みんなカアチャンに仕送りをしている言わば出稼ぎのチョンガーだ。気のせいだろうか、私はこのチョンガーという愛すべき言葉に若い連中は入れたくない。若いのはどうもナマしくていけないからだ。それは少しずるくて、とぼけていて、世の中男と女だけで出来るもんじゃない、という人生哲学みたいなものを持つている男達と思いたい。年の頃なら四十から五十代、仕事の為にやむなく、あるいは念願かなって家族と離ればなれに暮らしてはいるが、年のせいで腹が出っ張りかけたのや、オツムの方も白いのや薄いのや、中にはヒタイの延長になったのや様々である。世の中の事も一通り解っていて、仕事の鬼という程でもないが、さりとてデクノ坊でも無し、故郷の古巣はちゃんと心得ていて、きちんきちんと餌を運んでやっている。そのくせ家族や会社に対しては、「なんで俺がこの年になって、独り暮らしをせにやなんのか」とボヤくところもある男。いわば、一匹狼ならぬはぐれ狸である。

地方都市にチョンガー族が増え始めたのは、いつ頃からだったろうか。私の記憶によれば、たしか、昭和三十年頃からだったと思う。高度成長の波に乗って、生産と生活に片脚ずつ踏んばった亭主族は、上役とカアチャンのどちらの言うことを聞くか、二者択一のジレンマに追い込まれた末、やむなく独り暮らしをするようになった。そしてその頃から教育ママという言葉も出てきた。マイホームが出来て、子供が学校へ通いはじめ生活が落ち着くと、カアチャンはどうしりと我が家に根を生やす。よく気が回っておしゃべりで、自分では賢婦人を以て任じる

奥さんは、子供にかこつけて旦那をコントロールする術を身につけるようになった。その結果亭主族は、それとなく女房から家を出ていくように仕向けられる。面と向かつては言わないが「丈夫で留守ならそのほうがいい」と言わんばかりなのである。一方亭主のほうも、会社の為家族の為と口実を設けながら、心のどこかでは胸のときめくようなものを感じて、一人で旅に出る。つまり、夫婦で申し合わせた夫の家出にはかならない。今の言葉で言えばネオ・ホームレスといったところである。

盛岡へ来る以前、私は家族を引き連れて名古屋に住んでいたが、ある日友達の一人がさも感動の面持ちで言った。

「今日名古屋駅で、じつに奇妙な感じがしたね。駅のアナウンスでね、特急こだまが発車するとき、次は東京ーっって言うんだ。まるで国電並みだよ。日本も狭くなったなア」

こういう交通の便利さが、名古屋にチョンガー・ブームを巻き起こしたとも言える。もっともそれ以前にも、九州は福岡、北海道は札幌で、それぞれ「福チョン」や「札チョン」が誕生して、ネオ・ホームレスが増えつつあった。

今度盛岡へ来るとき、カアチャンはいみじくも宣うた。のたま

「近ごろは食事だって簡単よネ。インスタントでなんだってあるじゃない」

だが、そのあとしんみりと

「だけど病気になったら困るわね」

その下心たるや恐ろしい。『あんたはまだ原価償却が済んでいないんだから』と言わんばかりだ。こっちは内心舌打ちしながらも、寝そべっている子狸や、ぱくついている中狸を眺めれば、あらためて我が家の現状を認識せざるを得ない。『ヨーシやつたでー』と、狼にでも昇格したような気分であとにしたものだ。

飯は三合炊いて朝夕二回二日に分けて食う。洗濯掃除は日曜日、庭は狭いからほったらかしにして、植えた草花は繁るにまかせるから、ろくに花もつけない。誰も部屋の中まで覗く筈はないとばかり、万年床の敷きつ放しにしておいたら、隣の医院の二階からは丸見えであつた。若い看護婦がチヨクチヨク窓からこちらを見ているらしい。そこであるべく死角に入るよう工夫を余儀なくされた。

「あの人、キュウリを買うだろ。こりやあポリ袋に入ってるわね。そこへ塩をひとつまみ入れるんだ。そのまま冷蔵庫に入れとくと、二三日で漬け物の出来上がり」

と、K先輩。

「冷やご飯どうしてる？ 食べる分量だけドンブリに取るのよ。それをご飯蒸しに入れてあつためるの。したら後でドンブリだけ洗えば済むでしょ」

と、S姐さん。

「あんた、飯を食つちまったらすぐお茶を呑むかね、それとも後片付けをしてからにするかね。ワシは、ちゃんと片付けてからでないと、どうもお茶を呑む気になれないね」

これはその道十年近い大先輩の弁である。

さて盛岡にもいよいよ冬がやって来た。今朝の最低気温はマイナス三度だった。はぐれ狸の冬ごもりの季節到来だ。六畳ひと間に生活のすべてを集約する。テレビとコタツ、ストーブ、それに電話に本棚に寝床。これだけ揃えばまずは安心、春四月まで凍死する心配もない。カアチャンはそのへんも充分見通しているのだ。

私もべつに経済成長の犠牲者だなんて思わないし、体制やカアチャンと闘わなくちゃという気もしない。

いまごろカアチャンは、子狸たちと熟睡してるだろう。先日うちのテレビで『村のおんなは眠れない』という出稼ぎを扱った番組を放映していたが、私もカアチャンも、もはや夜が眠れない年でもなくなった。

「だがからだだけは気を付けなきゃ。ここで俺がポツクリ死んでも、誰も気がつかないもんな」

ああ縁起でもない、厭なことを考えるもんだ。もう酒も無くなった。どれ、タヌキ寝入りでもするでしょう。

ヘンシーン

私は生まれつき手のひらが大きくて指が短い。しかも、坊主指の先に横幅の広い爪がシジミ貝みたいに並んでいる。これは山師の父親や、畑仕事をしていた母親譲りのものだ。

山師というのは材木の仲買人のことで、父親は材木の話しか出来ない男であった。小学校の入学前に、画用紙一杯に大きな山と大きな木を描いたところ、「おつ、この木は筋が良いや。目通り一尺はあるかな」と褒めたついでに、私の手の甲を押さえて、「いまに大金をつかむ手だぞ」と言つて笑つた。

村で偉いのは村長と校長と駐在巡查で、母親は思案顔に「この子は学校の先生にでもしようか。先生なら白墨より重い物は持たずに済むから」と言つたが、これは百姓仕事之余程骨身にこたえていたからに違いない。

両親が期待をかけ且ついたわつてくれた手のひらを持ちながら、私はとうとう山師にも教師にもならなかった。生意気にも、こういう手は、そういう仕事しか出来ない手なのか」と反発